

## 「非社交と脱社交」

静岡県立大学教授・障害学会会長 石川 准さん (2003.12.3)



**ご紹介:** 高校時代に失明なさり、東大とニューヨーク州立大で社会学を学ばれました。昼は、アイデンティティ・ポリティックス論や感情社会学を専門とする社会学者、そして、夜はソフトウェアの開発をなさるといふスーパーマンです。日本語の文章を点字に翻訳する自動点訳ソフトなど情報処理技術分野のパイオニアであると同時に、『障害学への招待』『人はなぜ認められたいのか』『感情の社会学』など数々のご本があります。できたてのホヤホヤの障害学会の会長でもあります。

### トークから:

いま書いている本の中に「配慮の平等」といふ章があります。

従来の常識では「配慮を必要としない人」と「配慮を必要とする人たちが」いる、って人々は考えてきたんです。「配慮を必要とする人たちには、優しさとか共感をもって配慮をしましょうね」みたいな話。だから、「人に優しいバリアフリー社会」ってよく言われます。けれど、これは正しくないと思っています。

正しくは、「すでに配慮されている人たちと未だあまり配慮されていない人たち」である。マーケットメカニズムを通して、配慮というのは為されるので、多い人たちの都合っていうのはだまっけても配慮されるんです。人に優しいって、「優しい」って言葉を使いたい場合には、「優しくされている人たちと、優しくされていないひとたちがいる」っていうふうには考えていないと、話が進まないっていか、まず発想が最初のところで違ってしまうのではないかな、というふうには思っています。

例えば階段とスロープを考えてみると、階段は配慮とはみなされていないんですが、スロープは配慮だとみなされています。これは正しくない。なぜかというところ、階段を壊してみたらどうなるでしょう。階段がなくても二階に上れる人というところ、ロッククライマーと棒高跳びの選手ぐらいなんじゃないかな。つまり、高飛びできない人、ロッククライミングできない人々には、「すでに配慮されている」といふことなんです。自分たちが配慮されていることをすっかり忘れて「弱い立場の人たちを配慮しましょうね」といふ話はおかしいと思っています。「配慮の平等」といふ言葉を使っています。

「Human rights」といふてもいいんですが、日本では「人権」といふ言葉はあまり力をなげか持っていないで、人々の気持ちを揺さぶらないんですよね。「人権」といふ言葉をネガティブなものにしていく努力の方が成功してしまつた、といふえるかもしれません。「Human rights」といふ言葉は欧米社会ではまだ一定の力を持っていると思つても、日本では「人権」といふ言葉はあまり力がない言葉かもしれません。それで、あえて同じような言葉なんだけれども「配慮の平等」といふ言い方をしています。

いま書いている本のタイトルは、「見えるものと見えないもの～社交とアシスト～」といふいます。社交には、よそ行きの自分を見せる身振りといふものがあります。自分の1番いいところを見せるっていふのは、「私はあなたに気に入られたいと思つている」といふことでもあります。といふことは、「あなたのことを尊重している、あなたの存在を承認している

からこそ私は私の1番いいところを見せようと精一杯努力しているんですよ」という身振りだということになります。社交は、この他に、目的のない会話、礼儀作法、そういったものによって構成されています。社交によって何を行っているかということ、他者を承認する身振りの交換が行われているわけです。

高度に文明化された社会の中での社交は、お互いにお互いを承認し合うような身振り・もてなしなんですけれども、社交が破綻するということがあります。例えば24時間ずっと介護を受けていて、24時間ずっと社会的に振舞えるかということ、困難というか不可能です。あるいは精神障害のある人たちっていうのは、社交性というのは1番苦手な分野です。そうすると、心ならずも脱社交的というか、社会的なコミュニケーションが破綻してくるわけですね。

その時に実は、今度は、新しいモードで人と人との関係っていうのは始まっていくんじゃないかと考えています。それを「非社交」と言わずに「脱社交」と呼んだらいいんじゃないか。つまり「脱社交」と「非社交」は違う。「非社交的」っていうのは、相手を承認しようとする身振りに欠いているという、他者との関わり方です。あたかもそこに誰もいないかのように振舞ってしまうのが「非社交」ですね。

例えば、障害者がよく苦情を出す話として、介護に来ただけど、まるで自分がいないかのように振舞われてしまう。例えば携帯で誰かとおしゃべりをしてたりだとか、テレビのチャンネル勝手に変えたりだとか、冷蔵庫開けて勝手に何か飲んだりだとか、つまりあたかもそこにその人が存在しないかのように振舞うことが、たぶん「非社交的」な振る舞いということになると思います。

「脱社交的」な振る舞いというのは、社交をくずしたもののけれども、「非社交」とは違う。例えば礼儀正しく振舞うことは出来ないかもしれない。自分をよく見せる身振りは示せないかもしれない。だけれども、他者を承認する身振り、自分なりの表現の仕方では他者を承認しようとする身振りがそこにあれば、両者の間の関係はつながっていくのではないか。それを「脱社交」というふうに呼んだらいいんじゃないか。

誰かが脱社交的なモードに先に入ってくると、つまり裸に先になってくれると、自分も洋服を着ているのが恥ずかしくなって、裸になりやすい。つまり「脱社交性」っていうのは、ある種半分ぐらい裸になっている状態ですね。その脱社交的な関係を主催することが出来るのは、社会的に振舞う能力を部分的に欠いている人たちの方ではないか、というふうに思っています。そういうところに魅かれて、いろんな人たちが集まってきて、脱社交的な関係が点のように出来てきて、それがやがて広がって、線のようにつながって、ということがあるのではないかというふうに思っています。



「ハイテク読書」

読みたい本を読みたいときに読みたい場所で読む「読書権」のために。  
詳しくは石川さんのホームページを↓↓↓  
<http://fuji.u-shizuoka-ken.ac.jp/~ishikwa/>